

う方策が考えられるのだろうか。

とは言え、「家庭の教育力の低下（復活）」が題目的に唱えられがちな現在にあって「家庭教育責任論」にメスを入れ、その内実を解明しようとした本書は、改

めて子ども問題の現実を考えさせ、この研究分野の今後の方向と課題に大きな示唆を与える一冊となるだろう。

◆ B6判 251頁 本体2,800円  
信山社出版 2005年5月刊

■ 書 評 ■

陣内 靖彦 [著]

『東京師範学校生活史研究』

広島大学 山田 浩之

陣内靖彦氏の前著『日本の教員社会』はその副題「歴史社会学の視野」が示すように、教育社会学での歴史研究を特徴づける意欲作であった。教育社会学の領域では早くから歴史社会的視点による分析が行われてきたが、それが一種の「ブーム」ともなる鎗矢をこの書が果たしたように思う。『日本の教員社会』では統計的な資料の分析にとどまらず、教員や師範学校生のメンタリティにまで踏み込んだ分析が行われており、まさに教育社会史のすぐれた研究の成果と言えるものであった。当時、まだ大学院生であった筆者も中等教員の歴史的な分析をはじめるにあたり、『日本の教員社会』に大きな刺激を受け、また研究の指針を与えられた。

ここでとりあげる『東京師範学校生活史研究』は前著に続く、陣内氏の2冊目の単著である。まず、本書の内容を簡単に紹介しておこう。

第1章 東京府小学師範学校の設立（学制期）

- 第2章 東京府師範学校の模索（明治10年代）
- 第3章 東京府尋常師範学校の整備（明治後半期）
- 第4章 東京府立師範学校の拡充（明治末・大正初期）
- 第5章 東京府師範学校の変容（大正後半期）
- 第6章 師範学校の革新と統制（昭和戦前期）
- 第7章 師範学校の再編（戦中期）
- 第8章 東京学芸大学の発足（昭和戦後期）
- 第9章 新たな教員養成の展開（高度成長期以降）
- 第10章 変貌する教員養成大学（昭和末・平成期）

補論 都市社会の形成と教育の展開

本書では明治初期から現代までの東京に設置された師範学校、東京学芸大学といった教員養成機関が時系列で論じられている。そのうち第1章から第9章までは東京都立教育研究所編・発行『東京都

教育史・通史編』に掲載、提出されたものである（第9章は未刊）。これら一連の章では教員養成機関の制度的な変遷ばかりでなく、師範学校生の生活にまで言及され、東京に設置された教員養成機関の全体像が詳細に分析されている。

それに続く第10章は、それまでの章の続編として位置づけられているが、記述のされ方は大きく異なっている。この章は東京学芸大学を事例とはしているが、高度経済成長期以後の教員養成大学・学部を総括し、現在の教育改革における教員養成機関の展望を示すものである。さらに最後には補論として東京を事例とした都市と教育との関係が論じられている。

このように構成される本書は東京という大都市を舞台とした師範学校、そして東京学芸大学という教員養成機関の事例史として捉えられるだろう。本書は一見、陣内氏のストイックな文章もあいまって、師範学校の制度史が中心に綴られているように見える。しかし、そうした制度は都市の環境によって大きく影響され、変化していく。ときに東京の特殊な事情により、またときに集権的な教育政策により、師範学校や学芸大学の制度やそこの学生・生徒の生活は様相を変えていく。すなわち本書で描かれているのは師範学校や学芸大学と社会との相互作用である。むしろ本書は教員養成機関を事例としながら、東京という大都市の歴史を紡いだものだと読むべきなのだろう。

このように本書を読めば補論の位置づけは重要である。補論では東京という大都市と教育との関係が歴史的な背景とともに検討されている。つまり、第1章か

ら第10章までの舞台となる大都市の特徴と変貌がダイナミックに描かれているのである。補論を背景に第1章から第10章までを読み直せば、また新たな視点で本書を読み取ることが可能であろう。

本書はこのようにダイナミックな視点で分析が行われており、都市と教員養成との関係を見る上で重要な著作の一つであることは間違いない。しかし、本書に不満がないわけではない。それは本書のタイトルにもある「生活史」である。

本書では師範学校の制度的な側面だけでなく、その内実を明らかにするために各章ごとに「生活史」に関する節がもうけられている。そこでは確かに学校行事など、これまでの師範学校研究では不十分だった生徒の「生活」の一面が明らかにされている。しかし、実際の師範学校生の生活や文化は十分に描ききれていないように思う。師範学校生は旧制中学生とは異なる特殊な文化を持っていたとされる。実際、氏の前著では、そうした師範学校生の特質の背景が明らかにされていた。それならば、本書では師範学校生の持つ文化的側面とその特徴を「生活史」として描き出せばさらにダイナミックな都市社会論となったのではないだろうか。

もちろん、このことは本書の大半が『東京都教育史』の一部であるという制約にもよるのだろう。本書を下敷きに、さらに師範学校生の「生活」を浮き彫りにしながら、都市と教育との関係が紡がれることに期待したい。

◆ A5判 291頁 本体3,800円  
東京学芸大学出版会 2005年7月刊